# Kan 拡張のノート

@paper3510mm\*

## 2021年7月25日

#### 概要

Kan 拡張に関する個人的なノート. 未完成.

## 目次

1	Kan 拡張	1
1.1	Kan 拡張	1
1.2	各点 Kan 拡張	4
1.3	普遍随伴	7
1.4	すべての概念	Ś
1.5	Density	10

# 1 Kan 拡張

[Mac98, Ch. X] や [Rie17, Ch. 6] を参照のこと. [alg-d] もわかりやすい.

## 1.1 Kan 拡張

Kan 拡張は、自然変換についての普遍性を持つ概念である.

定義 1.1. 関手  $F: \mathcal{C} \to \mathcal{M}$  と  $K: \mathcal{C} \to \mathcal{D}$  に対して,K に沿った F の左 Kan 拡張 (left Kan extension) とは,

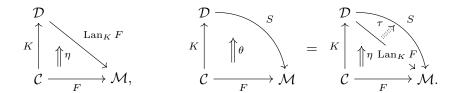
- 関手  $\operatorname{Lan}_K F \colon \mathcal{D} \to \mathcal{M}$
- 自然変換  $\eta \colon F \Rightarrow \operatorname{Lan}_K F \circ K$

の組  $(\operatorname{Lan}_K F, \eta)$  であって,

<sup>\*</sup> https://paper3510mm.github.io/notes.

• 任意の関手  $S: \mathcal{D} \to \mathcal{M}$  と自然変換  $\theta: F \Rightarrow S \circ K$  に対して,自然変換  $\tau: \operatorname{Lan}_K F \Rightarrow S$  が一意的に存在して  $\theta = \tau K \circ \eta$  が成り立つ

ときをいう.



普遍性により、 $\eta$  は全単射

$$\operatorname{Hom}_{\mathsf{Fun}(\mathcal{D},\mathcal{M})}(\operatorname{Lan}_K F, S) \cong \operatorname{Hom}_{\mathsf{Fun}(\mathcal{C},\mathcal{M})}(F, S \circ K) \tag{$\spadesuit$}$$

を誘導する. 逆に, S について自然な全単射 ( $\spadesuit$ ) が存在すれば,  $\operatorname{Lan}_K F$  は左 Kan 拡張になる. 双対的に, 右 Kan 拡張も定義できる.

定義 1.2. 関手  $F: \mathcal{C} \to \mathcal{M}$  と  $K: \mathcal{C} \to \mathcal{D}$  に対して,K に沿った F の右 Kan 拡張 ( $right\ Kan\ extension$ ) とは,

• 関手  $\operatorname{Ran}_K F \colon \mathcal{D} \to \mathcal{M}$ 

• 自然変換  $\varepsilon$ : Ran<sub>K</sub>  $F \circ K \Rightarrow F$ 

の組であって,

• 任意の関手  $S: \mathcal{D} \to \mathcal{M}$  と自然変換  $\theta: S \circ K \Rightarrow F$  に対して、自然変換  $\sigma: S \Rightarrow \operatorname{Ran}_K F$  が一意的に存在して  $\theta = \varepsilon \circ \sigma K$  が成り立つ

ときをいう.

普遍性により、 $\varepsilon$  は全単射

$$\operatorname{Hom}_{\mathsf{Fun}(\mathcal{D},\mathcal{M})}(S,\operatorname{Ran}_K F) \cong \operatorname{Hom}_{\mathsf{Fun}(\mathcal{C},\mathcal{M})}(S \circ K,F) \tag{$\heartsuit$}$$

を誘導する. 逆に,S について自然な全単射 ( $\heartsuit$ ) が存在すれば, $\mathrm{Ran}_K F$  は右  $\mathrm{Kan}$  拡張になる. 関手  $K\colon\mathcal{C}\to\mathcal{D}$  に対して, $K^*(S)=S\circ K$  と置くと  $K^*$  は関手

$$K^* \colon \operatorname{Fun}(\mathcal{D}, \mathcal{M}) \to \operatorname{Fun}(\mathcal{C}, \mathcal{M}), \ S \mapsto S \circ K$$

を定める. Kan 拡張の普遍性を表す全単射 ( $\spadesuit$ ), ( $\heartsuit$ ) から, Kan 拡張を取る操作が  $K^*$  の随伴になっていることがわかる.

**命題 1.3.** 関手  $K:\mathcal{C}\to\mathcal{D}$  と別な圏 M を考える. すべての関手  $F:\mathcal{C}\to M$  に対して左 Kan 拡張  $\operatorname{Lan}_K F$  が存在するとき,関手

$$\operatorname{Lan}_K \colon \operatorname{\mathsf{Fun}}(\mathcal{C},\mathcal{M}) \to \operatorname{\mathsf{Fun}}(\mathcal{D},\mathcal{M})$$

が定まり、 $Lan_K$  は  $K^*$  の左随伴になる.

またすべての関手  $F: \mathcal{C} \to \mathcal{M}$  に対して右 Kan 拡張 Ran<sub>K</sub> F が存在するとき、関手

$$\operatorname{Ran}_K \colon \operatorname{\mathsf{Fun}}(\mathcal{C},\mathcal{M}) \to \operatorname{\mathsf{Fun}}(\mathcal{D},\mathcal{M})$$

が定まり、 $Ran_K$  は  $K^*$  の右随伴になる.

$$\mathsf{Fun}(\mathcal{C},\mathcal{M}) \xleftarrow{\bot} \mathsf{Fun}(\mathcal{D},\mathcal{M}).$$

以降, 主に左 Kan 拡張を考えることにする.

例 1.4 (colimits as Kan extensions).  $\mathcal{D}=\{*\}$  の場合を考えると,  $K\colon\mathcal{C}\to\{*\}$  は \* への定関手になる. このとき

$$\mathsf{Fun}(\{*\},\mathcal{M})\cong\mathcal{M}$$

であるから、関手  $S: \{*\} \to \mathcal{M}$  は  $\mathcal{M}$  の対象  $m:=S(*)\in \mathcal{M}$  と同一視される.このとき関手  $S\circ K$  は、m への定関手  $\Delta_m:\mathcal{C}\to \mathcal{M}$  に等しい.よって左 Kan 拡張の全単射 (📣) は

$$\operatorname{Hom}_{\mathcal{M}}(\operatorname{Lan}_K F(*), m) \cong \operatorname{Hom}_{\operatorname{Fun}(\mathcal{C}, \mathcal{M})}(F, \Delta_m)$$

となる. この自然な全単射は,

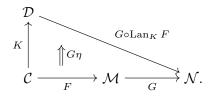
$$\operatorname{Lan}_K F(*) = \operatorname{colim} F$$

であることを表している. すなわち余極限は左 Kan 拡張である.

同様に極限は右 Kan 拡張である.

定義 1.5. 関手  $F: \mathcal{C} \to \mathcal{M}$  と  $K: \mathcal{C} \to \mathcal{D}$  について,左 Kan 拡張  $(\operatorname{Lan}_K F, \eta)$  が存在するとする.このとき関手  $G: \mathcal{M} \to \mathcal{N}$  が左 Kan 拡張  $(\operatorname{Lan}_K F, \eta)$  を**保つ**とは,組  $(G \circ \operatorname{Lan}_K F, G\eta)$ 

が GF の K に沿った左  $\operatorname{Kan}$  拡張  $\operatorname{Lan}_K GF$  であるときをいう.



#### ■ **命題 1.6.** 左随伴は左 Kan 拡張を保つ.

Proof. 関手  $F: \mathcal{C} \to \mathcal{M}$  と  $K: \mathcal{C} \to \mathcal{D}$  について左 Kan 拡張  $(\operatorname{Lan}_K F, \eta)$  が存在するとし、関手  $G: \mathcal{M} \to \mathcal{N}$  は右随伴 H を持つとする.このとき  $G_*: \operatorname{Fun}(\mathcal{D}, \mathcal{M}) \to \operatorname{Fun}(\mathcal{D}, \mathcal{N})$  が  $H_*$  を右随伴 に持つことに注意すると、任意の関手  $S: \mathcal{D} \to \mathcal{N}$  に対して

$$\operatorname{Hom}_{\mathsf{Fun}(\mathcal{D},\mathcal{N})}(G \circ \operatorname{Lan}_K F, S) \cong \operatorname{Hom}_{\mathsf{Fun}(\mathcal{D},\mathcal{M})}(\operatorname{Lan}_K F, H \circ S)$$
$$\cong \operatorname{Hom}_{\mathsf{Fun}(\mathcal{C},\mathcal{M})}(F, H \circ S \circ K)$$
$$\cong \operatorname{Hom}_{\mathsf{Fun}(\mathcal{C},\mathcal{N})}(G \circ F, K^*(S))$$

となり  $G \circ \operatorname{Lan}_K F \cong \operatorname{Lan}_K GF$  であることがわかる.

### 1.2 各点 Kan 拡張

Kan 拡張  $\operatorname{Lan}_K F$  は普遍性によって定義される関手であるが、これは具体的にはどのような関手であろうか。関手  $\operatorname{Lan}_K F$  を計算する一つの方法は、コンマ圏を使うことである.

定義 1.7. 関手  $K: \mathcal{C}_0 \to \mathcal{D}$  と  $L: \mathcal{C}_1 \to \mathcal{D}$  について、**コンマ**圏 (comma category)  $K \downarrow L$  とは、

- $K \downarrow L$  の対象は、 $C_0$  の対象  $c_0$  と  $C_1$  の対象  $c_1$  と D の射  $f \colon Kc_0 \to Lc_1$  の組  $(c_0, c_1, f)$  である
- $K \downarrow L$  の射  $(c_0, c_1, f) \rightarrow (c'_0, c'_1, f')$  とは、 $C_0$  の射  $g_0: c_0 \rightarrow c'_0$  と  $C_1$  の射  $g_1: c_1 \rightarrow c'_1$  の組  $(g_0, g_1)$  であって、図式

$$\begin{array}{ccc} Kc_0 & \xrightarrow{f} & Lc_1 \\ Kg_0 \downarrow & & \downarrow Lg_1 \\ Kc'_0 & \xrightarrow{f'} & Lc'_1 \end{array}$$

を可換にするもの

なる圏のことをいう.

特に  $\mathcal{C}_1=\{*\}$  であるとき, $L(*)=d\in\mathcal{D}$  として, $K\downarrow L=K\downarrow d$  と書く.すなわち圏  $K\downarrow d$  とは

- $K \downarrow d$  の対象は、 $\mathcal{C}$  の対象 c と  $\mathcal{D}$  の射  $f: Kc \rightarrow d$  の組 (c, f) である
- $K \downarrow d$  の射  $(c, f) \rightarrow (c', f')$  とは、C の射  $g: c \rightarrow c'$  であって図式



を可換にするもの

なる圏のことである.

コンマ圏  $K \downarrow L$  には自然な射影関手

$$\Pi_0 \colon K \downarrow L \to \mathcal{C}_0, \quad (c_0, c_1, f) \mapsto c_0$$
  
 $\Pi_1 \colon K \downarrow L \to \mathcal{C}_1, \quad (c_0, c_1, f) \mapsto c_1$ 

が存在している. さらに自然変換

$$\begin{array}{ccc} \mathcal{C}_1 & \xrightarrow{L} & \mathcal{D} \\ \Pi_1 & & & \uparrow \\ K \downarrow L & \xrightarrow{\Pi_0} & \mathcal{C}_0 \end{array}$$

が、 $(c_0, c_1, f) \in K \downarrow L$  に対して  $\rho_{(c_0, c_1, f)} := f$  と定めることで得られる.

注意 1.8. コンマ圏  $K \downarrow L$  はこのような図式の中で,ある意味で普遍的なものになっている.すなわち strict 2-category Cat での weighted limit になっている.

さて、ここで一つの観察をしよう. 関手  $F:\mathcal{C}\to\mathcal{M}$  と  $K:\mathcal{C}\to\mathcal{D}$  に対して左 Kan 拡張  $\operatorname{Lan}_K F$  が存在するとする. 対象  $d\in\mathcal{D}$  に対して  $\operatorname{Lan}_K F(d)$  を考えたい. ここで圏同型  $\mathcal{D}\cong\operatorname{Fun}(\{*\},\mathcal{D})$  により、対象  $d\in\mathcal{D}$  は関手  $d:\{*\}\to\mathcal{D}$  と思える. よって知りたい  $\operatorname{Lan}_K F(d)$  は、図式

$$\{*\} \xrightarrow{d} \mathcal{D}$$

$$K \uparrow \qquad \text{Lan}_{K} F$$

$$\mathcal{C} \xrightarrow{F} \mathcal{M},$$

の上辺である. コンマ圏  $K \downarrow d$  を取って図式

$$\begin{cases}
* \} \xrightarrow{d} \mathcal{D} \\
\Pi_{1} \uparrow \qquad \uparrow \qquad \uparrow \qquad \downarrow \\
K \downarrow d \xrightarrow{\Pi_{0}} \mathcal{C} \xrightarrow{F} \mathcal{M},
\end{cases} (\clubsuit)$$

を考えるとき, もしこれが左 Kan 拡張であるならば, 例 1.4 で見たように

$$\operatorname{Lan}_K F(d) \cong \operatorname{colim}(K \downarrow d \xrightarrow{\Pi_0} \mathcal{C} \xrightarrow{F} \mathcal{M})$$

となり、 $\operatorname{Lan}_K F(d)$  が計算できることがわかる.

実際には図式 (♣) は左 Kan 拡張になるとは限らない.しかしある意味でこの逆が成り立つ. 今,すべての対象  $d \in \mathcal{D}$  について余極限  $\operatorname{pLan}(d) \coloneqq \operatorname{colim}(K \downarrow d \xrightarrow{\Pi_0} \mathcal{C} \xrightarrow{F} \mathcal{M})$  が存在するとする.このとき対応  $d \mapsto \operatorname{pLan}(d)$  は関手

pLan: 
$$\mathcal{D} \to \mathcal{M}$$

を定めることが確認できる. この関手は、実は左 Kan 拡張になっていることがわかる.

定理 1.9. 関手  $F: \mathcal{C} \to \mathcal{M}$  と  $K: \mathcal{C} \to \mathcal{D}$  について、すべての対象  $d \in \mathcal{D}$  に対し余極限  $\operatorname{pLan}(d) \coloneqq \operatorname{colim}(K \downarrow d \xrightarrow{\Pi_0} \mathcal{C} \xrightarrow{F} \mathcal{M})$  が存在するとする.このとき関手  $\operatorname{pLan}(d)$  は、K に沿った F の左  $\operatorname{Kan}$  拡張を与える.

Proof. 頑張って左 Kan 拡張の普遍性を持つことを確認する.

- 定義 1.10. 定理 1.9 において得られる左 Kan 拡張を, 各点左 Kan 拡張 (pointwise left Kan extension) と呼ぶ.
- **系 1.11.** 関手  $F: \mathcal{C} \to \mathcal{M}$  と  $K: \mathcal{C} \to \mathcal{D}$  について,  $\mathcal{C}$  が small で  $\mathcal{M}$  が余完備であるとき, 左 Kan 拡張  $\operatorname{Lan}_K F$  が存在する. 特にこれは各点左 Kan 拡張である.

**系 1.12.** 余連続関手は各点左 Kan 拡張を保つ.

Proof. 各点左 Kan 拡張の構成から明らか.

最後に、各点左 Kan 拡張の特徴づけを示す。 圏  $\mathcal{C}$  上の前層圏を  $\mathsf{Psh}(\mathcal{C}) = \mathsf{Fun}(\mathcal{C}^\mathsf{op},\mathsf{Set})$  と書く.

補題 1.13.  $F: \mathcal{C} \to \mathcal{M}$  と  $K: \mathcal{C} \to \mathcal{D}$  を関手とする. 対象  $d \in \mathcal{D}$  について, コンマ圏  $K \downarrow d$  の第一射影を  $\Pi_0: K \downarrow d \to \mathcal{C}$  とする. このとき  $m \in \mathcal{M}$  について自然な全単射

$$\operatorname{Hom}_{\operatorname{\mathsf{Fun}}(K \sqcup d, \mathcal{M})}(F\Pi_0, \Delta_m) \cong \operatorname{Hom}_{\operatorname{\mathsf{Psh}}(\mathcal{C})}(\operatorname{Hom}_{\mathcal{D}}(K-, d), \operatorname{Hom}_{\mathcal{M}}(F-, m))$$

が成り立つ.

*Proof.* 頑張って示す. [Mac98, Ch. X, §5, Lem. 4], [Rie17, Lem. 6.3.8]. □

**注意 1.14.** より一般に次の全単射があるはず. 前層  $W: \mathcal{C}^{\mathrm{op}} \to \mathsf{Set}$  に対して,  $m \in \mathcal{M}$  について 自然な全単射

$$\operatorname{Hom}_{\operatorname{\mathsf{Fun}}(fW,\mathcal{M})}(F\Pi,\Delta_m) \cong \operatorname{Hom}_{\operatorname{\mathsf{Psh}}(\mathcal{C})}(W,\operatorname{Hom}_{\mathcal{M}}(F-,m))$$

がある. ここで  $\int W$  は W の category of elements で、 $\Pi$ :  $\int W \to C$  は自然な射影である.

**定理 1.15.** 関手  $F: \mathcal{C} \to \mathcal{M}, K: \mathcal{C} \to \mathcal{D}, T: \mathcal{D} \to \mathcal{M}$  に対して,次は同値である.

- (i) T は K に沿った F の各点左 Kan 拡張である.
- (ii) 対象  $d \in \mathcal{D}$ ,  $m \in \mathcal{M}$  について自然な全単射

$$\operatorname{Hom}_{\mathcal{M}}(Td, m) \cong \operatorname{Hom}_{\mathsf{Psh}(\mathcal{C})}(\operatorname{Hom}_{\mathcal{D}}(K-, d), \operatorname{Hom}_{\mathcal{M}}(F-, m))$$

が存在する.

(iii) T は K に沿った F の左 Kan 拡張であり、すべての対象  $m \in \mathcal{M}$  に対して関手  $\operatorname{Hom}_{\mathcal{M}}(-,m) \colon \mathcal{M} \to \operatorname{Set}^{\operatorname{op}}$  がこの Kan 拡張を保つ.

Proof. (i)  $\Rightarrow$  (iii): 定理 1.9 と系 1.12 よりわかる.

(iii)  $\Rightarrow$  (ii): T は K に沿った F の左 Kan 拡張であり、 $\operatorname{Hom}_{\mathcal{M}}(-,m)$ :  $\mathcal{M} \to \operatorname{Set}^{\operatorname{op}}$  がこれを保 つから、 $\operatorname{Hom}_{\mathcal{M}}(T-,m)$  が K に沿った  $\operatorname{Hom}_{\mathcal{M}}(F-,m)$  の左 Kan 拡張になる.よって任意の関 手  $S: \mathcal{D} \to \operatorname{Set}^{\operatorname{op}}$  に対して、自然な全単射

$$\operatorname{Hom}_{\operatorname{\mathsf{Fun}}(\mathcal{M},\operatorname{\mathsf{Set}}^{\operatorname{op}})}(\operatorname{\mathsf{Hom}}_{\mathcal{M}}(T-,m),S) \cong \operatorname{\mathsf{Hom}}_{\operatorname{\mathsf{Fun}}(\mathcal{C},\operatorname{\mathsf{Set}}^{\operatorname{op}})}(\operatorname{\mathsf{Hom}}_{\mathcal{M}}(F-,m),S\circ K)$$

が存在する. 反対圏で考えれば、

$$\operatorname{Hom}_{\mathsf{Psh}(\mathcal{M})}(S, \operatorname{Hom}_{\mathcal{M}}(T-, m)) \cong \operatorname{Hom}_{\mathsf{Psh}(\mathcal{C})}(S \circ K, \operatorname{Hom}_{\mathcal{M}}(F-, m))$$

となる.  $S = \text{Hom}_{\mathcal{D}}(-,d)$  を考えれば

$$\operatorname{Hom}_{\mathsf{Psh}(\mathcal{M})}(\operatorname{Hom}_{\mathcal{D}}(-,d),\operatorname{Hom}_{\mathcal{M}}(T-,m)) \cong \operatorname{Hom}_{\mathsf{Psh}(\mathcal{C})}(\operatorname{Hom}_{\mathcal{D}}(K-,d),\operatorname{Hom}_{\mathcal{M}}(F-,m))$$

となり、米田の補題により

$$\operatorname{Hom}_{\mathcal{M}}(Td, m) \cong \operatorname{Hom}_{\mathsf{Psh}(\mathcal{C})}(\operatorname{Hom}_{\mathcal{D}}(K-, d), \operatorname{Hom}_{\mathcal{M}}(F-, m))$$

を得る.

(ii) 
$$\Rightarrow$$
 (i): 補題 1.13 より  $Td \cong \operatorname{colim}(F\Pi_0)$  となるから、定理 1.9 よりわかる.

#### 1.3 普遍随伴

小さい圏から余完備な圏への関手は,すべての左 Kan 拡張を持つのであった.特に small な圏  $\mathcal{C}$  に対して,米田埋め込み  $\mathbf{y}\colon \mathcal{C}\to \mathsf{Psh}(\mathcal{C})$  の左 Kan 拡張は常に存在する.

定理 1.16. 小さい圏  $\mathcal C$  に対する米田埋め込み  $y\colon \mathcal C\to \mathsf{Psh}(\mathcal C)$  の関手  $F\colon \mathcal C\to \mathcal D$  に沿った左 Kan 拡張  $\mathsf{Lan}_F y$  について, $d\in \mathcal D$  に対して

$$\operatorname{Lan}_{F} \mathsf{y}(d) \cong \operatorname{Hom}_{\mathcal{D}}(F-,d)$$

が成り立つ.

Proof. 前層圏 Psh(C) は余完備だから  $Lan_F$  y は各点左 Kan 拡張である. よって定理 1.15 の (ii) を用いると,任意の  $P \in Psh(C)$  に対して

$$\operatorname{Hom}_{\mathsf{Psh}(\mathcal{C})}(\operatorname{Lan}_F \mathsf{y}(d), P) \cong \operatorname{Hom}_{\mathsf{Psh}(\mathcal{C})}(\operatorname{Hom}_{\mathcal{D}}(F-, d), \operatorname{Hom}_{\mathcal{C}}(\mathsf{y}-, P))$$
  
$$\cong \operatorname{Hom}_{\mathsf{Psh}(\mathcal{C})}(\operatorname{Hom}_{\mathcal{D}}(F-, d), P)$$

が成り立つ. これは P について自然だから、米田の補題により  $\mathrm{Lan}_F \, \mathsf{y}(d) \cong \mathrm{Hom}_{\mathcal{D}}(F-,d)$  が成り立つことがわかる.

**系 1.17.** 小さい圏  $\mathcal{C}$  の米田埋め込み  $\mathsf{y} \colon \mathcal{C} \to \mathsf{Psh}(\mathcal{C})$  について、 $\mathsf{Lan}_{\mathsf{v}} \mathsf{y} \cong \mathsf{Id}_{\mathcal{C}}$  が成り立つ.

*Proof.* 任意の  $P \in Psh(\mathcal{C})$  に対して、定理 1.16 と米田の補題により、

$$\operatorname{Lan}_{\mathsf{v}} \mathsf{y}(P) \cong \operatorname{Hom}_{\mathsf{Psh}(\mathcal{C})}(\mathsf{y}-,P) \cong P$$

となり、 $Lan_{\mathbf{v}}\mathbf{y} \cong Id_{\mathcal{C}}$  が成り立つ.

**系 1.18.** 小さい圏 C 上のすべての前層  $P \in \mathsf{Psh}(C)$  は、表現可能関手の余極限で表せる.

Proof. 系 1.17 より  $P \cong Lan_y y(P)$  が成り立つが,今  $Lan_y y$  は各点左 Kan 拡張であるから,定理 1.9 より

$$\begin{split} P &\cong \operatorname{Lan_{y}} \mathsf{y}(P) \\ &\cong \operatorname{colim}(\mathsf{y} \downarrow P \xrightarrow{\Pi_{0}} \mathcal{C} \xrightarrow{\mathsf{y}} \mathsf{Psh}(\mathcal{C})) \\ &= \operatorname{colim}_{(c,x) \in \mathsf{y} \downarrow P} \mathsf{y}(c) \end{split}$$

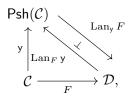
となる.

関手 F に沿った米田埋め込み y の左 Kan 拡張  $Lan_Fy$  を考えたが、逆方向に y に沿った F の左 Kan 拡張  $Lan_yF$  も考えられる.実はこれらの関手は、良い場合には随伴を定めることがわかる.

定理 1.19 (普遍随伴 [Rie17, Remark 6.5.9], [Gro15, Digression 1.8], [nLab, "nerve and realization"]).  $F: \mathcal{C} \to \mathcal{D}$  を関手とし, $\mathcal{C}$  は小さい圏であるとする.米田埋め込み y に沿った F の各点左 Kan 拡張 Lan, F が存在するとき,随伴

$$\operatorname{Lan}_{\mathsf{v}} F \dashv \operatorname{Lan}_{F} \mathsf{y}$$

が存在する.特にDが余完備なら、これが成り立つ.



Proof. 各点左 Kan 拡張 Lany F が存在するとき,定理 1.15 (ii) と米田の補題と定理 1.16 を用いると, $d \in \mathcal{D}$  と  $P \in \mathsf{Psh}(\mathcal{C})$  について

$$\operatorname{Hom}_{\mathcal{D}}(\operatorname{Lan}_{\mathsf{y}} F(P), d) \cong \operatorname{Hom}_{\mathsf{Psh}(\mathcal{C})}(\operatorname{Hom}_{\mathsf{Psh}(\mathcal{C})}(\mathsf{y}-, P), \operatorname{Hom}_{\mathcal{D}}(F-, d))$$

$$\cong \operatorname{Hom}_{\mathsf{Psh}(\mathcal{C})}(P, \operatorname{Hom}_{\mathcal{D}}(F-, d))$$

$$\cong \operatorname{Hom}_{\mathsf{Psh}(\mathcal{C})}(P, \operatorname{Lan}_{F} \mathsf{y}(D))$$

が成り立ち、よって  $\operatorname{Lan}_{\mathsf{v}} F$  は  $\operatorname{Lan}_{F} \mathsf{y}$  の左随伴である.

このようにして得られる随伴  $\operatorname{Lan}_{\mathsf{y}} F \dashv \operatorname{Lan}_{F} \mathsf{y}$  を普遍随伴と呼ぶことにする ( $[\operatorname{alg-d}]$ ).

**命題 1.20.**  $F: \mathcal{C} \to \mathcal{M}$  と  $K: \mathcal{C} \to \mathcal{D}$  を関手とする. 各点左 Kan 拡張  $(\operatorname{Lan}_K F, \eta)$  が存在するとき,K が充満忠実ならば, $\eta$  が自然同型である.

Proof. [Mac98, Ch. X, §3, Cor. 3], [Rie17, Cor. 6.3.9].

**定理 1.21** ([Kel82, Theorem 4.51], [KaSc06, Corollary 2.7.4]). C, D を圏とし、C は small で D は余完備であるとする.

- (i) すべての余連続な関手  $S\colon \mathsf{Psh}(\mathcal{C})\to \mathcal{D}$  は, $F=S\circ \mathsf{y}$  の  $\mathsf{y}$  に沿った左 Kan 拡張である.特に右随伴を持つ.
- (ii) すべての随伴  $S \dashv T$ :  $Psh(\mathcal{C}) \to \mathcal{D}$  は普遍随伴である.
- (iii) 関手  $\operatorname{Lan}_{y}$ :  $\operatorname{Fun}(\mathcal{C},\mathcal{D}) \to \operatorname{Fun}_{\operatorname{cc}}(\operatorname{Psh}(\mathcal{C}),\mathcal{D})$  は圏同値を与える.ここで  $\operatorname{Fun}_{\operatorname{cc}}$  は余連続な 関手のなす充満部分圏を表す.

Proof.

#### 1.4 すべての概念

すべての概念は Kan 拡張である.

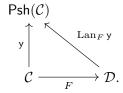
すでに例 1.4 において余極限が左 Kan 拡張であることをみた.

- (i) F と G が随伴  $(F \dashv G, \eta, \varepsilon)$  をなすとき, $(G, \eta)$  は F に沿った  $\mathrm{Id}_{\mathcal{C}}$  の左 Kan 拡張  $\mathrm{Lan}_F \mathrm{Id}_{\mathcal{C}}$  であり, $(F, \varepsilon)$  は G に沿った  $\mathrm{Id}_{\mathcal{D}}$  の右 Kan 拡張  $\mathrm{Ran}_G \mathrm{Id}_{\mathcal{D}}$  である.
- (ii) 逆に  $(G, \eta: \mathrm{Id}_{\mathcal{C}} \Rightarrow GF)$  が F に沿った  $\mathrm{Id}_{\mathcal{C}}$  の左 Kan 拡張で、F がこの Kan 拡張を保つ とき、 $\eta$  を unit とする随伴  $F \dashv G$  がある.

Proof.

### 1.5 Density

定義 1.23. 関手  $F: \mathcal{C} \to \mathcal{D}$  が稠密 (dense) であるとは,F に沿った米田埋め込み  $y: \mathcal{C} \to \mathsf{Psh}(\mathcal{C})$  の左 Kan 拡張が充満忠実であるときをいう.



系 1.17 より米田埋め込み y は dense である.

## 参考文献

[Gro15] Moritz Groth. A short course on ∞-categories. 2015. https://arxiv.org/abs/1007. 2925.

[KaSc06] Masaki Kashiwara and Pierre Schapira. Categories and sheaves. Grundlehren der Mathematischen Wissenschaften [Fundamental Principles of Mathematical Sciences] 332, Springer-Verlag, Berlin, 2006.

[Kel82] G. M. Kelly. Basic concepts of enriched category theory. London Mathematical Society Lecture Note Series 64, Cambridge University Press, Cambridge-New York, 1982. Reprints in Theory and Applications of Categories 10, 2005.

[Mac98] Saunders Mac Lane. Categories for the Working Mathematician. Second edition. Graduate Texts in Mathematics 5, Springer-Verlag, New York, 1998.

[Rie17] Emily Riehl. Category Theory in Context. Dover Publications, 2017.

[nLab] nLab, -2021. https://ncatlab.org/nlab/show/HomePage.

[alg-d] alg-d. "Kan 拡張", 圈論—壱大整域. http://alg-d.com/math/kan\_extension/kan\_extension.pdf.